

メッセージアウトライン マタイの福音書7：7～11 「良いものを与えてくださる神」

祈りに関する教えは6:5～15節で教えられているが、そこでは偽善的祈りに対して真の祈りが何であるかが示され、戒められていた。そして今日の箇所では祈りの積極的勧めと励まし教えられている。

[7-8]「求めなさい。そうすれば与えられます。探しなさい。そうすれば見出します。たたきなさい。そうすれば開かれます。だれでも、求める者は受け、探す者は見出し、たたく者には開かれます」

私たちはすでに7:1～5節において人をさばいてはならないということを教えられ、6節においては、聖なるものを犬や豚のような人々に与えるなどという厳しい一面も教えられた。そして次に来るのがこの7～11節までの言葉である。この山上の説教においてイエスが教えられていることは順不同で並べられているのではなく、ちゃんとした秩序をもって並べられていることを知らなければならない。その意味で前後の箇所とは密接なつながりがある。この7節でイエスが「求めなさい…」と言っておられるのは、1～6節の教えにおいて私たち信仰者にとって求めることがどうしても必要であることが分かってくるからである。では何を求めるのか。イエスは先の1～6節において私たちがまるで裁判官でもあるかのように人を非難し、さばく傾向があることを教えられた。また私たちが兄弟の目からちりを取ろうとする前に自分自身の目から梁を取り除くようにしなければならないことも教えられた。そしてこれらのことを実行しようとするときに、どうしても自分自身では完全に成し遂げることのできない限界があることに気がつくのである。自分本位、自己中心、誤解、偏見、愛や思いやりのなさ、敵意、ねたみ、そねみ、争う思い等々で神のみこころにかなった正しい判断とそれに基づいた行いができなくなってしまう。それゆえ私たちにはどうしても神の助け、神の恵みが必要なのである。私たちのうち誰がこのイエスが教えられたことを十分に実行できると言える者があるだろうか。誰もいない。かえって自分がどんなに罪深い者であるかということを自覚させられ、自分の無力さを知らされるのである。

しかし、ここで座り込んでしまわないためにこの7節以下の教え「求めなさい。そうすれば与えられます。……」という約束が与えられているのである。すなわち私たちが神のみこころを行い、イエスの教えられたことを実行するために必要な助けや知恵や恵みが豊かに与えられるという素晴らしい約束なのである。

多くの信仰者は残念ながらこの素晴らしい約束を活用していない。また間違っ

た考え方で実行に移すために何も与えられないということがある。ある人々は「求めなさい。そうすれば与えられます」と言われているので、何でも求めてもよいのだと考えて自分のためにお金を求める。しかし、残念ながら与えられないので失望してしまう。またある人々は即座に病気の癒されることを求める。しかし、これもかなえられないとやはり失望して、神などいないのだと考え、信仰さえも捨ててしまう。このような考え方はイエスが教えようとされていることとは違うことに気がつかなければならない。

求めるものは何でも与えてくれる魔法使いや召使いのように神を考えてはならない。

本日の聖書の箇所で言っているのは全く別のことなのである。では何をイエスは教えておられるのか。それは、私たちイエス・キリストを自分の救い主と信じる信仰者にとって、真に必要なものは神に求めれば、必ず与えられるということがこの箇所では教えられているのである。そしてそれはこのイエスの教えを実行できるように神の助け、神の恵みが与えられるように願うことなのである。

自分自身を省みて、自分が神の前に何の誇るところもなく、みじめな罪深い人間であることを知っている者、罪の深みに陥って苦しみ悲しみ、あえいでいる者こそがこのイエスの言葉の真の意味に気がつく。そしてそれはや自分により頼むのではなく、神の約束により頼むことを始めるのである。18世紀において、かつて奴隷商人であったジョン・ニュートンは自分の罪深さに気がついて、ただただ神の恵みにより頼み、信仰者として成長していき、変えられ、牧師となり、あの不朽の名作アメイジング・グレイス(驚くばかりの恵み)を作詞し、世界に大きな影響を与えたのであった。

→聖歌229番「驚くばかりの恵みなりき この身の汚れを 知れるわれに 恵みはわが身の恐れを消し まかする心を 起こさせたり 危険をも 罣をも 避けえたるは 恵みのみわざと いうほかなし……」

使徒パウロも自分自身の内を正直に見つめたとき、「私は本当にみじめな人間です。だれがこの死のからだから、私を救い出してくれるのでしょうか」(ローマ7:24)と告白している。しかし彼はそれだけにとどまらず、イエス・キリストにあって救われた者の持つ特権、御霊に従い、御霊に導かれることの素晴らしさ教えている。

→ローマ8章

物質的に満たされて、それでよいと思っている人は聖書など読もうとしないし、神などどうでもよいと考えるであろう。しかし、ひとたび自分の本当の姿は神の前に裸であり、みじめな者であることに気がつくならばもはやそのような状態にとどまることを良しとはしないのである。

イエスがこの7節で「求めなさい、探しなさい、たたきなさい」と表現を変えて三度も繰り返しておられるのは、それほど執拗に、熱心に求め続けなさいということの強

調である。熱心に継続して神の恵みを、助けを、信仰者としての歩み、聖さ、その品性に必要なものを求めていくことが大切。

ルカ11:5-8においてイエスはその熱心さの例を教えておられる。

そのように私たちが熱心に求め、探し、たたき続けるならば神は与えてくださるのである。

[9-11]「あなたがたのうちだれが、自分の子がパンを求めているのに石を与えるでしょうか。魚を求めているのに、蛇を与えるでしょうか。このように、あなたがたは悪い者であっても、自分の子どもたちには良いものを与えることを知っているのです。それならなおのこと、天におられるあなたがたの父は、ご自分に求める者たちに、良いものを与えてくださらないことがあるでしょうか」

ここでは父と子の例があげられている。父と子の関係において、子どもがパンや魚を求めるのに、代わりに石や蛇を与える父親はいない。至極当然のことである。しかし、私たちはここで重要な事実気がつかなければならない。すなわち、神は私たちイエス・キリストを自分の救い主と信じる者にとって父となってくださっているのである。それゆえ、天の父なる神は子である信仰者たちの求めに応じてくださるのである。しかし、神はこの地上の人間すべての父ではないということも知らなければならない。神に属する者とこの世に属する者との間にははっきりと線が引かれているのである。主イエス・キリストを自分の救い主と信じ受け入れた者だけが、神を天の父と呼ぶことができるのである。繰り返しになるがこのイエスの山上の説教の教えは弟子たち、信仰者たちに対して語られていることを覚えておかなければならない。それゆえ9節の「あなたがた」とは弟子たち、信仰者たち、クリスチャンたちを指して語られていることばなのである。11節の「あなたがたは悪い者であっても」とは神の前に罪ある存在であり、墮落し、神を知らず、神に逆らい続けている悪い者であってもという意味。最初に神によって創造された人間アダムが神の前に罪を犯して以来のこの世のすべての人間を指している。そのようなわけで神は私たちの父となってくださっているので、私たちには決して悪いものはお与えにならない。

この神の子とされている事実の上に立って私たちは父なる神に求め、探し、たたくことができるのである。しかし、覚えておかなければならないことは父なる神は私たちが求めてもそれが不必要であったり、害を与えるものであったりするならばお与えにならない。たとえそれが私たちの目にはどうしても必要なものであったり、大切なものであると思うものであったり、それが私たちの霊的成長や信仰の歩みに良くないものであるならば神はお与えにならないであろう。私たちは現在だけを見て判断するが、すべてをご存じの父なる神はそうではない。11節の後半で「天に

おられるあなたがたの父は、ご自分に求める者たちに、良いものを与えてくださらないことがあるでしょうか」と言われているがこの「良いもの」とは何であろう。並行箇所のカラカ11:13には次のように書かれている。「ですから、あなたがたは悪い者であっても、自分の子どもたちには良いものを与えることを知っています。それならなおのこと、天の父はご自分に求める者たちに聖霊を与えてくださいます」

それゆえこの「良いもの」とは聖霊のことであることが分かる。聖霊こそは助け主であり、すべての良いものの提供元である。→ヨハネ14:16-17「そしてわたくしが父にお願いすると、父はもう一人の助け主をお与えくださり、その助け主がいつまでも、あなたがたとともにいるようにしてください。この方は真理の御霊です。世はこの方を見ることも知ることもないので、受け入れることができません。あなたがたは、この方を知っています。この方はあなたがたとともにおられ、また、あなたがたのうちにいらっしゃるようになるのです」

聖霊は確かにイエス・キリストを自分の救い主と信じる者に与えられるが(使徒2:38)、それでもなお肉的な思いに満たされて、この世の人々と何も変わらない生き方をしていくこともある。そうではなく、与えられている聖霊(御霊)の実を結び、この山上の説教で教えられている生き方を実践することができるように、私たちはなお一層私たちの信仰の助け主なる聖霊により頼んでいくことが大切であり、そのことができるように祈り求める必要があるのである。

それゆえ、私たちがまず求めなければならないのは聖霊(御霊)であり、その御霊が結ばせてくださる実によって今まで教えられてきた自力では到底実行できない父なる神の子としての生き方ができるようにしてくださるのである。

私たちが真剣に、熱心に、心から祈り求めるならばそのことを父なる神が聞いて、答えてくださる。そして私たちの生き方を通して神のすばらしさ、神が生きて働いておられること、また神の愛と恵みを世の人々が知ることができるようになるのである。

→ガラテヤ 5 : 16～26